

『今夜も興奮！ 富士山 四人の
からみ合い。』

制作：鶴 三〇〇

キャスト ・ 主演 曾我部 成一

・ からみ 鈴木 道夫

・ 先生 永見 哲

・ 鶴 上原 秀秋

特別出演 古山 登

協力 朝日新聞

日本外タレ協会

東京工業大学 狂エルクラブ 推選

第一景

「美しい……」彼は一枚の写真を見ながら
そうつぶやいていた。その写真には股間もあら
わぬ金髪女が写っていた。やがて彼の手は下
半身をまきぐり出ししていた。「あ、あ、あ」

いや！これはちがうのだこれでは古木のパタ
ーンになる。彼の見ていたのは大股開きの
写真なんかではないのだ。

……その写真には朝の陽光をあびた彼の

ももひき等が写っていた。彼はうっとりとした目で自分の姿に見入っていた。

ここでひとっ読者諸兄に伝えておきたいのだが彼は決してナルシストではない。その写真に写っている彼の姿がどれ程美しかったのである。現に彼がナルシストでない証拠にナルシスト達が毎晩かいているマス(中には朝晩の方もいるそうだが)の回数が週2〜3回であることがあげられる。これを聞けば彼がナルシストでないことはお解りいただけると思う。

……そして彼はだんだん薄れていった記憶が戻ってくるのを感じていた。

第二景

「秋の日はつるや落とし。」先生が言った言葉に三人は感心していた。沈みかけた太陽をフィルムに収めようとしていたからにはシャッターを押す間もなく陽の落ちてしまった西の空をまだうらめしそうに眺めながら「ほ〜んとだ。へえ先生はなかなか教養があるなあ。」と言った。他の二人も同音同調するように「本当、はやかったなあ。」と口々に言い会っていた。

さてここに登場した四人がこの物語の主要人物なのであるが彼らはその日「ふじすぼるたいむらいやる」なる大学のクラブの行事に便乗してここ富士山の五合目に来ていたのであった。彼ら四人は五合目に一泊して明朝山頂をめざそうという狂エルクラブの勇士達であった。第一景で登場した「彼はその一人で薙」という名である。薙という字の読み方については読者諸兄の自由としておきたい。ここで紹介には放送コードにかかるとの恐れがある。悪しからず。

翌朝 彼らは6時に起きあがった。山の朝は寒い。ふりえながらホテルを出るとかすがが写真を撮ることを提案した。セルフタイマーをかけた四人は写真におさまった。

「え〜と どちらに行けばいいのかなあ。」などと言いながら山道を登ってゆくと力造がこの道はちがうぞと言い出した。ガイドブックを見ると確かに変だしかたをしいに彼らは引き返し こんどは本当に山頂を目指して歩き出したのだ。

6合目までは非常に楽な道であった。暑くてかなわないと言、て薙は身につけていたものをぬぎ出した。どこからともなく「タプー」が流れ

て来た。

「ちょっとだけよ。」そのストリッパーはそう言うとかぶりつきに陣取った古山の前で股を開いておきた。古山はすばやくジッパーをおろすとすぐに硬直化した。いちもをにぎに締めると又互をかきはじめた。強いその部分のにおいが鼻をつく。「あ、あ、あ」

いかんいかん。ちょっとまともな文を書き続けると頭が疲れてあらぬことを考えてしまう。

----- 薙がタイトをぬぎももひきになると三人は声をそろえて非難し始めた。「おいおい本気かよ。やだやあ。」カラスである。「お前、しかしどういふかこが好きだよ。おい離れて歩けよ。」

カ造である。「薙さんはもうしょうがないですねえ。」先生である。注：先生はカ造から、薙の大学のクラブの後輩であるので「さん」づけで呼んでいる。

「おい写真とってやれよ。」カ造がカラスに言った。カラスは「うん、そうだよを絶体とろう。」などと言っている。7合目付近でその美しい薙のももひき姿をカラスが写真におさめた。8合目を過ぎたあたりから外人の女性がすわり込んで景色を眺めて

いた。「こんにちは」と四人があいさつをして通り
過ぎると彼女はニコニコとおあいそ笑いを返し
ていた。その少し先に、ひげ面の白人と日本人
の女の人が一語にいたが我々が通り過ぎると声
をたてて笑い出した。何故だろう薮は外人
の笑いを理解できるからか。所詮白い奴は
白い奴さと思えるがらも一語にいた日本人の女
も笑っていたことを思い出し不可解に感じて
いた。他の三人にはその笑いの意味が解ったようで
しきりにそのことを話していたが彼らの話の断片が
ようやく薮はその笑いが自分のももひきまきにあること
を知った。

9合目付近から薮とからすかしきくに頭が痛
いと言い出した。高山病だまあなどと言いながら
頭痛を感じるいカ造ヤ先生を「脳ミソのねえ
奴はいいなあ。」などとさかんにきり出した。
「いや適応性があるんだおれは。」などとカ造が
反論を始め、狂エルクラブ独特の調子でいろ
いろと理窟をつけて四人は互いにきり合い
を演じた。

「74才：22回目の登頂」と書かれた
石を見て感心しながら石段を登るととこ

はずでに 山頂であった。火口に近づくと正面には富士山 測候所が見え、下の方の赤いがかみには白い、いろいろの文字が浮き出ていた。

「おい、きれいだなあ。赤の中に白が浮き出て。」だれかが言うと「うん、おれたちも書いていきたいな。」「そうしようぜ。」「うん。」などと言っているが、彼らは火口に目をむけた。火口は思ったより小さく見えた。その尻を眺めながら四人はマスをかき出した。なに飲えた四人には富士のその火口が何に見えたのであろうか。突然そこに古山が現れると「火口マスカへえ。」と感心したように言い「おれ、そういらぬよりSMが好きなんだよね。」などと言出し、五人はマス談議を始めた。

そして 乱交パーティーが始まった。

----- 赤いがかみに浮き出ていた白い文字は大きな石を並べて書かれたものであった。

彼らは「千五大」とあるのを見つけ「千」の字を「東」とし「CC」を付け加えて記念カリイをした。後にその「東五大CC」という文字

が新聞誌上を大ぎわしたことは皆さんはず
にご存知のことであろう。

測候所の無愛想な男を横目にならめるが
四人は山を下り始めた。

富士の下りは面白い。「砂走り」なる呼ば
れがあるがまさにその通りである。カ造はあ
たかもスキーをするようにスロープをえがき
ながらかけおりにゆく。かさはすごい勢いで
下たかと思うと急に止まり、腰に手を置く
得意のスタイルで休んでいるかと思うと
また急に走り出す。先生は一万五千円
のオーダーシューズが心配らしくゆくり
降りて来る。その中間で薙は足のうら
た感じる砂の感触を楽しんでいた。足
のうらの快感はしだいに体中に伝わり
て行った。

第三景

「母は是の先にも小生感帯があるのよ」古山
はいつか読んだ小説にそう書いてあったのを思い出
していた。彼はそっと手をのびし足のうらに觸れて
みた。「なんだくすぐったいだけじゃなにか。」そう言
うと彼は手のにおいをおいでみた。「うっくせえ

まあしょうがぬえなあ 一週間もふろには入って
ないんだからさ。 とうとうと彼は「お部屋の香
水「グレード」を足にふきかけた。そのにおいを
かいでいると彼の頭の中になつかしい母の笑顔
が浮かんで来た。「そうだ。 明日は久しぶりに
家に帰るかな。 とうつぶやくと彼は 部屋
のうに ちらかった 新緑のにおいのする ティッシュ
ペーパーを拾い始めた。 完

尚 この物語はフィクションによる部分が多いこ
とをご理解願います。 例えば 古山氏は 奥在の
人物ではありません。 我クラブ前部長の古木氏は
ストリップ°は行ったことがないし 部屋に マス紙をち
らかすようなこともしない人物であることを私は保
障します。

